

## 『無の神学』を読む① 総序、第一部 無の神学原論

## 『無の神学』第一部 第一章 キリスト・イエスは「無」者である

2002年1月20日（東京 新宿）

奥田 昌道

聖霊のバプテスマ 総序 「根源現実」と「絶対次元」 キリスト体験の内容 第一部 無の神学原論 第一章 キリスト・イエスは「無」者である」 無は聖霊体受の場 第五章 「キリスト者とは何か——キリストの無者」

## ● 聖霊のバプテスマ

明けましてお目出度うございます。クリスマスは昨年の12月16日に皆さんと一緒にいたしました。それから5週間たちました。初めて皆さんにお目にかかることになりました。

今日は、新春講演会「『無の神学』を読む」ということです。『無者キリスト』（小池辰雄著作集第一巻）を昨年1年間、取っ組んでまいりました。いわばその延長線上にありますのが、この『無の神学』（著作集第三巻）です。これは姉妹編といつてもいいと思います。ただ、『無者キリスト』は非常によく纏まとまっています。それに比べますと、この『無の神学』というのは必ずしも纏まりはよくないと、私はそういう印象を受けました。

第一部と第二部に分かれています。第一部の方は非常に原理的なことを、それから歴史的に預言者から順を追って、宗教改革そして現代というものを、いわば書き下ろし的に——もちろん資料は、先生はあちらこちらに書かれたようなものを土台にしながら——一応、書かれています。

第二部の方は、先生ご自身が辿たどつてこられた思索、神学的な思索、それを自分のお考えのもとに配列して現在に至るということになっている。一番早いのは20歳のときに書かれた「祈りの宗教哲学」という——これは未発表のものだと言っておられますが——そこから始まりまして、「即身即主」という1967年、これは京都大阪の方で特別集会があった時に書かれたもの、そういうところで終おります。そしてその前に、ドイツのハンブルクで講演された「無の神学、突破の神学基礎論」というのが置かれていたり、今までに先生がずっと歩んでこられたものを跡づけているものが第二部です。

皆さんにとりましては、先生の最近の講筵を録音で聞いておられますと、この『無の神学』をお読みになると少し感じが違うと思う。つまり、最近の方が親しみやすい。あるいは、最近のものに親しんでおられる方には、『無の神学』というの若干とつきにくいという印象が否めません。先生自身の中でも変化が起きているのではないかと思う。何といっても、強烈な体験は1950年11月のあの聖霊体験です。これは決定的でありますので、その影響



が物凄く全体を貫いています。逆にそれがまた躓きにもなるわけです。

「そういう聖霊体験のない人間はどうしたらいいのか、体験を求めて何か修行しなければいけないのか」

という問題になってきます。そのあたりを私自身が非常に感じております。

いわゆる先生が仰る「根源現実」です。絶対的な恵みとしての根源現実というものと、現実にあのようにして聖霊体験をなさったということの、その繋がりはどうなるのか。

「聖霊体験をしなければ、全然救われていないのか。それとも、聖霊体験は、根源現実において救われていることの一つの証に過ぎないのか」

これは大問題ですよ。私たちは、

「旧き我は十字架で死んでいる」

ということとは誰でも受けとられる。では、

「一体、新しい我はどこで生まれたのか」

と、去年から私は問題にしました。新しい私はどこで生まれたのか。小池先生は、

「聖霊のバプテスマで生まれる」

と仰る。そうしたら、聖霊のバプテスマを受けなかった者は死んだままですよ。しかし、聖霊のバプテスマというのは、ある人において起こる現象です。しかも神さまがなさることであつて、神さまが主権を持つておられて、自分が聖霊のバプテスマを望むからその通り起こるとは限らないわけです。自分があの使徒行伝に表れているような、小池先生が体験されたような、

「あの聖霊のバプテスマが欲しい」

と祈つて、何十年祈つてもそれが得られなかったら、その人は一体どうなるのか。正に私

がその張本人な者です。そういうことからしますと、聖霊体験は非常に大事ではあるけれども、それを絶対視してはならない。それは一つの神さまの方からの、その人における一つの確証、証拠をその人において示された、その人にとっては非常に大事なものであつたけれども、いわゆる現象としての聖霊のバプテスマというものが万人に共通ではない。つまり、

「現象としての使徒行伝のような聖霊体験がなければ、その人は聖霊を受けていないか、聖霊の器でないか」

といったら、そうではないということを示し上げたい。

聖霊がなければ何も始まらない。聖霊がなければ、人間は新しく生まれません。では、どこで一体新しく生まれるのか。そのあたりを『無の神学』で——神学ですから、私も神学させてもらいます——皆さんと一緒に味わいたいと思う。

先生の仰ることは、ある面で矛盾があるんですよ。

「あなた方は空気を無条件で吸っているでしょ」



「はい、無条件に吸っています」

「神の救いというものはそんなものだよ。みんな誰でもが、ただそのまま、あるがまま、そのまま受けとることができるものがキリストの救いなんだ。条件のあるものはダメだ」

と。これは先生のおは、こですよ、

「条件付けられたものはダメだ」

と。そうするとそれは、

「聖霊のバプテスマを受けなければ救われていない」

というのと、どこでどう結びつくのかということになります。

しかも、救いというのは神さまの独占活動です。神さまがご自分の意志でなさることなんです、一人ひとりにおいて。だから、具体的な個々人においてそれがどんな形で表れるか。パウロのように逆らっている奴には物凄い形で出てくるわけです。それでなければ、目が覚めませんから。けれども、非常におとなしい柔和な方にはそんなことは要らない。知らないまにその人は聖霊に感染してしまっている。聖霊感染症、これは生命に感染するからありがたいですよ（笑）。

賜物は様々なんです。賜物は、癒しの賜物とか、異言の賜物、預言の賜物、その他、知恵の賜物、それから山をも動かす信仰という賜物も、パウロは挙げています。そういう賜物は武器です。相手と戦うのに武器が要ります。相手はサタンですから。そういう相手と戦い、それから病める人を癒し、苦しんでいる人を解放するには武器が要ります。その武器は、その人その人において必要なものをお与えになる。それは正に我々は神さまの道具として使われる。

道具というのは、「道に具<sup>そな</sup>えられたもの」、道の具です。神さま、キリストという本当の道、そのために具えられている具——おかずも具ですけども——それが我々一人ひとりです。その一人ひとりにはいろんな味をお付けになるわけです。塩味もあれば、砂糖味もあるし、薄い味もあれば、濃い味もあるでしょう。ピリリと辛いのもあるでしょうし。それぞれ一人ひとりに無限にお分かちくださるのが賜物というもので、共通の恵みというのは愛なんです。聖霊は共通の恵みとして皆さんに与えられている。

第一、こういう集会へ来ようというのには聖霊の導き以外に考えられません。私はいつも言う。新宿なり繁華街を歩いてごらん下さい。何千人の人に出会うでしょう。一体その中の誰が日曜日、この山里のごとき、人混みからはずれた静寂な、静かな場へ行つて、ただキリストだけを求める。キリストにお会いしたい、キリストの生命に今日もあずかりたいと、そういう殊勝な心をもつて集まってくるというのは、普通の人間からは出てこない。それは聖霊が導いて、

「こつちへ来るんだよ、こつちへ来るんだよ」



と。戦いはあります。

「今日は行きたくないな、今日はいやだな」

とか、戦いはあると思う。その時に、「行こう」と踏み出さしてくださるのが聖霊の力ですよ。皆さんは、「集会にはもう来るものだ」と思っておいでになってもいいかも知れないけれども。私なんか、走っている人間からしますと、朝起きますと、「今日は走りに行こうか行くまいか」と、どれだけ戦いがあるかしれません。踏み出して走りに行つて、あの代々木公園の緑の中に入ったら、「ああ、よかったなあ」と思いますよ。でも、それに至るまでは非常に戦いがある。肉体的に疲れていたり、休息を要する時には、私は無理はしません。それはもう身体の要求に従つてそのまま休みます。けれども、そうでなくて何となく、「眠いなあ、寒そうだなあ」とか、いわゆる怠け心ですね。そういう時に踏み出して行けば、非常に恵みの中に入るというのは自分が味わっているけれども、集会もある意味ではそういうところがあるかも知れません。

皆さんは誰にも義務付けられていない。何一つ強制力はない。それでもお出でになるというのは、聖霊がプッシュしてくださるから来ています。私はそう思っています。私は自分も含めて——いや、自分を見るからこそですけれども——人間というのはそんなにできがよくない。親切な人だとか、優秀な人はいっぱいいますよ。そうじゃなくて、神さまとの関わりにおいて胸を張つて、

「私は本当に神さまの子供として相應しい人間です」

なんて言える者はそういないのではないかと思う。むしろ、神さまの前に立つたら、ちょっとどこかへ「穴があれば隠りたい」というのが本当の人間の姿ではないでしょうか。私はそう思っている。裏を返しますと、

「どんな人間でもその気になれば救っていただける」

という、「その気になれば」というのが大事なんです。その気になるように、また導いてくださっているのが聖霊なんです。それから、聖徒たちの祈りですよ。お互いに祈りあう。いや、現世にいる人間だけではありません。もう既に召されて天界で働いている諸々の天使たち、聖徒たち、そういう者たちの祈りが一人ひとりの上に私はかかっていると思う。だから、ひと一人の存在のためにどれだけの祈りが注がれているか。そういうものによって、私たちはこういうふうに集会に導かれ、キリストを求めるといふ心を与えられるのだと思う。

人間、誰でもその気になれば——「その気になれば」というのは本当に心をそちらへ向ければということ——心をそちらへ向ければ誰でも無条件に救っていただけるといふのが、これが恵みというものです。しかもそれは、「神は愛だから」といふ抽象的な命題の恵みではない。

そうではなくて、まさにイエス・キリストというお方が我々を救わんがためにこの地上



に下ってきてくださった。それ以外にイエス・キリストは用がなかった。この地上へ降りてくる必要はなかった。もともと神さまと一緒におられた霊なるキリスト、天地を創造し給うたキリストなんです。

いわば「神さまの独子<sup>ひとりご</sup>」とヨハネ伝に書いてあります。神さまのみそばにあつて、

「万物を創るのに、お前の好きなように創れ」  
という神さまの御意をいただいて、そして天地を創造された。

「昔在まし、今在まし、のち来たり給うお方」

それが霊なるイエス・キリストです。この霊なるイエス・キリストがわざわざその絶対次元の天界を棄て去って、この我々の相対次元の地上におりて来て、この悩める我々を救い上げようとしてくださった。ここに愛があります。しかもその愛は、極まる所は十字架だったんですから。これは誰も他の救い主はしてくれなかった。キリストだけが十字架という具体的な事実をもって、

「お前を私が引き受けた。お前を生命から遠ざけているものを全部、その要因を全部、私はもう片づけた。お前を天界へ連れていく」

という、これがキリストの愛なんです。このキリストの愛から漏れるものは誰もない。聖霊のバプテスマを受けようが、受けまいが、そんなことは関係ない。キリストの本願の愛というものは捕まえたら放さない。ただ我々は現世で生きています。現世で生きているのに原動力が要ります。原動力が、小池先生にしたら聖霊のバプテスマなんです。聖霊のバプテスマということを通して

「そういうことが骨の髄までしみ入りました」

という告白をせしめる原動力になるのが聖霊のバプテスマだと私は思っています。それは、ああいうふうには自覚的に全身が痺れたり、異言が飛び出したり、いわゆるこの世ならざる体験をするという形の聖霊のバプテスマもあれば、またそうではなく、先程申しましたように、いつのまにか聖霊が染み込んでしまつて、

「もう私はキリスト抜きで生活なんて考えられません。私にとって一番大事なのはキリストさまです。その方との太いパイプなしに生きていく人生なんて、私には考えられません。その方に心を向けている時だけ私は平安があります」

というのもある。私の心境はそうなんです。私はいわゆる幸福は求めません。私はキリストといつも一緒にいたい。キリストの中にいつも包まれてありたい。

「御霊のわが主はわが身をいただき、十字架に耐えうる力をたもう」

という、あの先生の讃美歌。あの現実の中に居りたい。それが私の願いです。その中に居らしてくださいれば、私がどんな仕事をやっていようと、全部それは神の業、天職なんです。神さまは、無駄には活かしておられない。キリストに出会うまでは、やっぱり自分の幸福とか、自分の名誉とか、自分の人生で生きたという証を残したいとか、それは「自分、自分



自分」なんです。ところが、キリストは、

「そんな自分なんて問題じゃないよ。私がお前を活かす。お前は私の手下となつて働いてごらん。気がついたらお前は凄い輝きなんだよ」

と。何も求めない人が一番豊かに満たされる。己を求めた人はそれつきり。これが逆説なんです。だから、

「無者、それが無限無量者だ」

と、先生は仰いますね。若い人だったら、

「自分を問題にしないで、ただキリスト、キリストなんて言っている。そんなつまらない——まるでコンブを噛んで噛んで味がなくなった、スルメを噛んで噛んで味がぬけたような——そんなすべてを吸い取られて絞り取られた自分なんて全くおもしろくない」

と、若い人はそう言うかも知れませんが。そうじゃないんです。「自分、自分、自分」と囚われてる時にはそれだけだったのが、キリストに熱中して自分を忘れてみたら、その時に物凄い宝の自分がそこに現に生まれている。そこに気づかされる。

「己を救わんとする者は己の命を失い、わがため福音のために己を棄てる者は永遠の生命を得る」

とキリストは仰つた。その焦点に立つているのがこの十字架なんです。人間はみんな自分を惜しんでいます。自分が可愛いくてしょうがない。自分を棄てるなんてことは、どんな修行をしたって、まあできないですね。よほどの人なら知りませんが。しかし、キリストさまは、

「お前は『棄てられない、棄てられない』と悩んでいるね。自分に囚われて悩んでいる。そのゆえに私が十字架で片づけたんだ。十字架でなくなっている。本当にそうなんだよ」

と。これが小池先生がいつも仰る「根源現実」です。

## ● 総序

小池先生のお話を聞いたり、本を読んでいるときに、キーワードがいくつかある。躰きの言葉もいくつかあります。それを今日はまず解説します。それから、「無の神学」に入ってもいいし、「無の神学」を読みながら、それを解説してもいいし、どちらにしようかなと。私は昨日一日、そのために準備しておりました。

始めの「総序」という所を読んで、それからキーワードの解説に入りましょう。私が今日、皆さんとご一緒に味わいたいのは、先ず「総序」という所です。それから、第一部「無の神学原論」の第一章「キリスト・イエスは「無」者である」。それから跳びまして、第五章「キリスト者とは何か——キリストの無者」、(一) a 「人間の破れ」、b 「十字架の碎け」、c 「聖



霊の突入」。それから、第六章「十字架・聖霊の証者——エン・クリスト的実存」の四「信の使徒パウロ」の所。そこまで行けるかどうかは分かりませんが、大体そういう順序です。先生の問題意識、自覚と申しますか、先生が何を一番問題にしておられるかというのは、この「総序」という所にはつきり出てきますけれども、結局は「十字架・聖霊」ということです。「十字架・聖霊」に集中しています。だから、それを私たちも体得すれば、他はひとりで読めるようになります。私は皆さんと読んでいく時に、順を追っては読みません。ポイントを拾い上げてやっていきたいと思えます。

それではまず「総序」の所の第一部に関する所だけを先ず味わっていきこうと思います。

### 《総序》

……第一部は「無の神学原論」である。東洋人であり、日本人である私は、「無」という言が、無私、徹底、無常、無常、空無、靈妙、絶対、深遠、鴻大、無量、無限等の概念と深い連関をもった内容を表現し得る言であると思つので、おのずから撰ばされたのである。

この中でも特にやはり先生の「無」と関わりがあるのは、この「無私」ということ。それから「絶対」というのも関わりがあります。「無量」「無限」、こういう言葉と深い関わりがあります。

何よりもこの無が、宇宙的な霊的人格たるキリストを表わすに最もふさわしい言と思つたからである。《

「宇宙的な霊的人格たるキリスト」、まずこの言葉に、皆さん、痺れてください。こんなのをスーッと読んではいけません。ここで立ち止まって瞑想して、この「宇宙的な霊的人格たるキリスト」とは何なのか。正にキリストという方は宇宙を包んで居られるような方だ。「天地創造の主」といいますが、天地はキリストによって創られたんですから。「光あれよ」と言えば、光があつた。キリストの霊言が創造をなさしめたわけです。「宇宙」といふたら、広大無辺でしょ。この宇宙に思いをせたら、この世のちっぽけなことはみなすつ飛ぶ。宇宙というのは凄い。我々の住んでいる太陽系だけでも凄いとあります。いやいや、地球だけでも凄い。いや、日本の国だけでも凄い。北の端から南の端まで走ってごらん下さい。この地球みたいな星がいっぱいあるわけでしょ。たくさん銀河や星雲がある。何万年という。光は1秒間に地球を7回半回るとか聞いたけれども、それが1年かかってやつと届くのが1光年でしょ。それが1万年かかって、1万年かかる。そういう物凄いとつもない距離の星の光です。そういう宇宙がいくつもいくつもあるというんでしょ、我々の知らざる宇宙というのが、それを全部、キリストは包摂しておられるというから、これは気が遠くなる。

「霊なるキリスト」という。「霊」といっても、それは幽霊のような霊ではない。全く霊的人格です。意志を持つておられる。「光あれ!」と仰れば、光がある。これを救おうと思えば、



お救いになる。その霊なるキリストが宿られたのがナザレのイエスなんです。

「このイエスは大変なひとだ」

と、小池先生が言うのは当たり前です。大変なひとですよ。その宇宙の霊的人格キリストがなんとマリアさんの中に宿って、人となって現れてきた。これが物凄い神秘です。しかも、何故においでくださったかという、我々を救おうと、我々一人ひとりに本当の生命を与えようと言われた。

「生きていてよかった。生命をいただいて、うれしいです。ありがとうございます」

という、その喜びを与えようと。しかも、その生命をくださったその親がいた。その親は肉親の親ではなくて、本当に神・キリストという方が私たちの本当の主であり、親であつて、我々は霊的にその子どもである。生物体としての人間という次元では、父があり母があり、またその父があり母がありと、溯さかのぼっていきますけれども。そういう肉の生命体というのではなくて、霊的人格的存在というのが、「我」というものです。一方ではそういう父母という流れを受けていますけれども、それを突き抜けて、神さまとの直結関係が大事なんです。だから、パウロは、

「もはや我々はお互いに肉によりて知ることはいけません。霊によつて知ろう」

と言うのはそういうことです。我々は一方ではそういう遺伝学的にいろんな規定を受けた——「DNAがどうだこうだ」ということで、そこから逃れられない宿命を負いながらも——そこから解き放されて本当の自由の姿を下さったのがキリストなんです。キリストの十字架が、あらゆる運命的な呪いを全部引き受けてくださった。

よく、自分の生まれを呪う方がある。自分の生まれは恥ずかしい生まれだった。不義の子であるとか。父親がわからないとか。それで非常に苦しむ方がある。肉のレベルではそうです。そういう苦しみ全部取っ払って、

「あなたは本当に新しい人なんだ、新しく生まれるんだよ」

と言つてくださったのが十字架です。そして復活なんです。あのキリストの十字架と共に旧き我は死に、キリストが復活されたその時に私たちも聖霊によつて復活させられた。そして、聖霊降臨によつて実際に聖霊が現実はこの地上に降りてきた。

「主と共に十字架せられたり、もはや我生くるにあらず」

というのは「根源現実」といいます。キーワードになるけれども、即ち、天の御許において、キリストがいらつしやつたあの天界において起こっている霊的現実なんです。

キリストは地上に下りてきて、十字架を負つて死んでくださった。これは相対的我々の次元の中で、相対的なこの現象界で起こっている生まの事実です。その生まの事実でありながら——その奥にあるものは、天界においては見えない霊の十字架として——それが投影されている、その本ものなんです。キリストのあの悲惨な壮絶な惨憺たる十字架、血なまぐさい十字架において、天界においてそれが永遠の神の事実として残っている。



あの歴史上の十字架はもう跡形もなく無くなっている。人の記憶からも消えていき、風化していくでしょう。けれども、神さまの世界での十字架は依然として厳然と立っているんです、霊界において。これを「根源現実」といいます。この根源現実においてあなたはもう根源的に救われ、癒され、甦らされている。

キリストは甦られたですから、それが私たちの新しい生命なんです。その生命を「本当にそうだよ」と自覚させてくれるのが、「聖霊のバプテスマ」という形で聖霊が染み込んで、**「助け主を与える」と約束してくださいました。**

「この助け主は真理の御霊だ。あなた方にすべてそういう天界の真理に関わることを解きあかして、人が教えなくても、わからせてくださる。助け主、導き主、真理の御霊は、私が今までに語っておいたことを全部、思い起こさせて、ことごとく悟らせてくださる。これをあなた方は受けとりなさい」

と。それを送りたくて送りたくてしようがなかった。キリストは天界へのぼった。そして、あのようにペンテコステの時にくださった。

ペンテコステはあそこで歴史的に起こりました。今度は一人ひとりにおいていろんな形で起こるわけです。一回起こったからそれでいいということではない。これは先生の本を読んだらちゃんと出てきます。しかも、

「知らないまに聖霊を受けている」

と書いてある。そういうことまで仰っている。先生は自覚的に聖霊を受けられたけれども、

「原理的には知らぬ間に受けてしまうものだ」

ということが出てくる。そういうことで、皆さん、ご心配にならないで安心していただきたい。

《それゆえキリストを中心とした神学であり、聖書を主題とした神学ではあるが、所謂「聖書神学」でもなく、セリとて「組織神学」でもない。質的にはこの両者を超包する。

聖書は神の啓示史を中心とした書であるが、神が靈光を闇の世に投じて、これを靈光の世界に救済せんとする深刻な悲劇の相を有ったドラマであるので、》

ここに「深刻な」と書いておられます。「啓示史」という、「啓示」というのは神さまの方から根源の真理を我々にわかるように、ある具体的な事実を通してお示しくださることなんです。たとえば、モーセに率いられてイスラエルの民が紅海を渡って行った。海が二つに割れた。これは歴史的な事実としても、それが何を意味しているかというのが「啓示」なんです。小池先生は、

「出エジプトは奴隷、肉体的な奴隷状態からの解放」

として捉えられた、それが表している啓示の事実として。

「バビロン捕囚は罪に対する背きとして神さまが罰せられたのがバビロン捕囚で、そこからペルシャ王クロスによって解き放された。エルサレムへ還ってきた。こ



れは罪からの解放だ」

と。だから、イスラエルの民族にとつては、出エジプトというのは「苦役からの解放」で、いわゆる肉体的な生物体としての我々が抱えているいろんな苦しみからの解き放ちです。それから、バビロン捕囚からの解放というのは、「内的な苦しみ、罪と死からの解放」を表している啓示の事実だと。イスラエルの民族にとつてはこの二つがとても大事な歴史的なでき事で、その最後に来られたのがイエス・キリストという、これは最も大事な啓示の事実なんです。

イスラエル民族は、そうは受けられないで、始めの二つに止まっているわけです。我々は、最も大事なものはイエス・キリストがこの始めに示された二つの啓示の事実を全部集約して、ご自分の十字架で止めを刺された。苦役からの解放、病からの解放、苦しみからの解放、それから罪と死からの解放。十字架で死を滅ぼし、病を滅ぼし、闇の力を滅ぼすという形で表してくださった。

だから、「十字架」がまた啓示の事実なんです。しかし、何故、御子キリストがあのような十字架の苦しみを味わわねばならなかったか。これは悲劇以外の何ものでもないでしょう。神の愛し子、神の独子、しかも全く父の御意に従いきった義人キリスト。これを十字架で殺すという、殺されるに任せるという、これは悲劇以外の何ものでもない。しかし、その悲劇の前にたくさんの悲劇があった。それは聖書に証されています。アベルに始まっています。「義人アベルの血」。これはマタイ伝に出てきます。マタイ伝23章34節から、

「<sup>34</sup>この故に視よ、我なんじらに預言者・智者・学者らを遣さん、其の中の或者を殺し、十字架につけ、或者を汝らの会堂にて鞭うち、町より町に逐い苦しめん。

神さまから遣わされた者たちをこのようにあしらう。これは悲劇以外の何ものでもない。

<sup>35</sup>之によりて義人アベルの血より、聖所と祭壇との間にて汝らが殺ししバラキヤの子ザカリヤの血に至るまで、地上にて流したる正しき血は、皆なんじらに報い来らん。<sup>36</sup>まことに汝らに告ぐ、これらの事はみな今の代に報い来るべし。<sup>37</sup>ああエルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、遣された人々を石にて撃つ者よ、牝鶏のその雛を翼の下に集むることく、我なんじの子どもを集めんとせしこと幾度ぞや、されど汝らは好まざりき。<sup>38</sup>視よ、汝らの家は廢てられて汝らに遣らん。<sup>39</sup>われ汝らに告ぐ「讚むべきかな、主の名によりて来る者」と、汝等のいう時の至るまでは、今より我を見ざるべし」(マタイ23・34〜39)

キリストも十字架で殺されるということをご自分で言っておられる。しかも、己が民に殺される。異邦人に殺されるのではない。己が民に殺される。しかも、その己が民を救わんとしてキリストは来ておられる。



「ああエルサレム、エルサレム」

と、凄い愛国者ですよ、イエス・キリストは。本当の意味でのイスラエル民族を愛された。しかし、その愛するイスラエルによって殺されるという、これは悲劇以外の何ものでもない。しかもそこに神の深いけいりん経綸があつたという。

ですから、先生がお書きになったように、正にその意味では闇ですね、現世は闇です。その闇の世に神が霊の光、霊光を投じた。そして、

《これを霊光の世界に救済せんとする深刻な悲劇の相を有つたドラマであるので、私の神学の性格も霊的な劇的なものとならざるを得ない。霊的劇的神学 (geistige dramatische Theologie) などという言葉はないが、そんな気魂のものである。》

そして次が大事ですね。

内実の焦点からは、十字架・聖霊の神学である。》

これが大事です、私たちにとりましては。「十字架・聖霊」に焦点を絞って、そこからすべてのものを見ていく。目の前のいろいろな問題があるでしょう。いろいろ解決していただきたいことがあるでしょう。それもまた大事なことでしよう。しかし、私たちが小池先生からいただいているこの信仰の世界というのは、もうひとつ奥深いものだとは私を受けとっています。そのもつと根源なるもの、根底にあるもの、その焦点にしっかりと魂をすえる。それが土台になって初めて、我々の目に見える問題もまた自ずと解かれる。目に見える問題だけを問題にして、「解いてください、解いてください」とばかりやっていますと、一生それで終わってしまう。対処療法で終わってしまう。そうでなくて、本当に根源なるものに溯る。そこで本当の解決を得たら、そこから自ずとあらゆる応用問題が全部解けてくる。

キリストは責任を持たれる。そこにどこでも私たちの魂を沈めていこうと。これが実は小池先生が叫んでおられる、この『無の神学』であり『無者キリスト』であると思う。これはどんなキリスト教でも受けいれないかもしれない。もうちよつとはつきりしたカリキュラムがあつて、「そのカリキュラム通りにやつて、すべてが解決すればいいではないですか」と。しかし、先生はそうではない。もつと深みへ、根源へと向かう。傲慢でも何でもない。先生の魂はそれではなければどうにもならなかった。私の魂もそれではなければどうにもならないのですよ。この一番根源的なもので、

「大丈夫だ、何が来ても大丈夫だ。お前はいつたお仆れても天国だ。私と一緒にだから」と。そのはつきりした内的確信、自覚、平安、それがあつて初めて力ある歩みができる。この地上で生き生きと生きていくことができる。私はそう思っている。先生が生涯をかけて叫ばれたのは、そのことだと思っている。それがここに表れています。

《内実の焦点からは、十字架・聖霊の神学である。》

聖書の著者は神であり、主人公はキリストである。旧約に於てキリストはロゴスとして隠れた実存主であり、……》



「ロゴス・キリスト」という、

「初めに言ありき」

とありました。旧約に於てはキリストは「ロゴス」、霊なるキリストとして隠れていた。旧約聖書では、「エホバの神様」が出てきます。「キリスト」というのは出てきませんから。「エホバの霊」という形で臨んでいます。

小池先生はいつか、「旧約の神の霊と新約の聖霊」という題で講筵されました。この「旧約の神の霊」というのは「エホバの霊」です。これが人間に働きかけると、いったいどうなりますか。人間は焼き尽くされるしかない。なぜならば、人間には罪がありますから。聖なる、義なる神の霊がダイレクトに来たら、私たちはふっ飛ばされて爆死するしかない。預言者はもう恐れおののいているでしょ。イザヤだつて、

「私は唇の穢れた者で、とても貴神のお役目は務まりません」

と。しかし、燃えた炭火のようなものが飛んできて、イザヤの唇をなでた。

「お前は潔い。だから、行け！」

と命ぜられた。

「モーセがああシナイ山で御言をいただいた時も、雷鳴轟く恐ろしい光景だった」

とヘブル書に載っています。つまり、エホバの霊と我々罪びとが直かに対面しますと、これは生きていられない。だから、

「神を見た者は死ぬ」

と旧約聖書では書かれています。後姿しか見てはいかん。神が通られたあとの姿を見るしかない。顔と顔を合わせて見たら死んでしまう。そのくらいに緊張関係がある。この厳しさを忘れてはいかん。「なあなあ」で、ただただ甘やかしているのではない。まず峻厳なる義の神がいて、その義の神の義をもろに受けたのがキリスト・イエスです。

そして、変電所みたいなものですね、百万ボルトの電流を、我々の体に心地よい温かい電流に変えてくださっているのがキリストの十字架です。審判の電流を癒しの、生命を与える電流に変えてくださっているのがキリストの十字架という変電所ですよ。だから、皆さん、変電所を見られたら、「ああ、キリストだ」と思ってくださいいね（笑）。

やはり、この旧約の厳しきというのがあって、新約の愛、恵み、有難さがわかる。戦後の教育がおかしくなっているのは、その厳しさがなく、甘やかすことだけがあるからです。これが間違っている。変な体罰だとか、変な形の感情的な怒りをぶつけるのは間違っている。そうではなくて、正しい裁きがやはり教育の世界にはないといけないわけです。厳しさがあって、そして初めて有り難い愛がある。

新島襄は、自分が出張して留守中に、生徒がストライキをやったというので、朝礼の時に壇上で自分の腕を鞭で血が出るまで叩いた。それで学生たちは悔い改めたという。学生



たちを鞭打たなかった。自分を鞭打った。「校長の不徳の致すところだ」というわけです。そういう厳しさがあつての赦しということ。それが旧約の世界です。

その「エホバの霊」に対して、「新約の聖霊」というのは、この神の霊がキリストの十字架を通つて来ている。神の霊とキリストの霊はもう密着です。この「神の霊」と「キリストの霊」は別ものですよ、別人格ですから。

「われ汝を喜ぶ」

という、父の懐にあつた独り子なるキリストなんです。これは別に一つ。その共通項として、小池先生は「聖霊」ということを仰います。この辺になつてくると難しく私たちにはわからないけれども。「父・御子・聖霊」という。

「ナザレのイエス」というのは、地上におられたイエスさまは、天界に霊としておられた方がマリアさんの中に宿つて、そこでお生まれになった人間イエスです。霊界のキリストがそこに宿られた。そして絶えず、神さまのことを「父よ、父よ」と言つておられた。キリストの霊がここに宿つていたわけです。しかしながら、ヨルダンで水のバプテスマを受けられた時に、

「聖霊、鳩の如くに降つてきた」

とありますから、このキリストの霊、神の霊、それから聖霊はやはり別ものだという事にならざるをえません。そして、聖霊に導かれて、荒野の試みに遭われる。

キリストになぜ聖霊が降つてきたかという事、ご自分を空っぽにして明け渡して、悔い改めなんか必要のないお方が、

「私もバプテスマを受ける。私もあなた方と同じだよ」

と言って、ヨルダンの水に身を浸した。その砕けの姿、神さまの前に自分を何もしていない。「私は善き人間だ、私は義人だ」とか、何も思つておられない。それを小池先生は「無」と言われた。自分を何もしていない。神さまの前に本当に明け渡しておられる姿。そこに天が開けて聖霊が鳩の如く降つてきた、滝の如く降つてきた。

この聖霊という方は、霊なるキリスト、父なる神の霊とはまた別人格としての聖霊というふうな位置づけられている。しかも、この聖霊は両者を結んで、両者を媒介している。浸透している霊です。だから、「三位一体」なんて、頭で考えたってわかりっこない。そういうものだと思うだけです。神、霊的人格としての神さま。それから、霊的人格としてのキリスト、天界のキリスト。それから、地上のイエス。その間を媒介するのが聖霊です。イエスさまは、聖霊というお方を自分のうちなる霊とはつきり区別しておられます。

「人間イエス、私をボロクソに言つたってかまわない。いくら反抗したってか

まわらない。しかし、聖霊を穢す者は永遠に許されない。絶対に赦されない罪は聖霊を穢す罪だ」

と仰つた。それくらいイエスという方は聖霊という方を崇めておられる。これは本当に父



から遣わされて来た聖霊なるお方であるという思いだから、「私をボロクソに言ってもいいけれども、聖霊をボロクソに言ったら許さない」と言われた。これがまたイエスさまの素晴らしさですね。聖霊の御業みわざに対して、

「あれは悪魔の首魁しゅかいによってやっている。ベルゼブルの悪霊の首かしらによって、イエスはいろんな奇蹟の業をやっている」

と敵どもが言ったから、イエスは憤慨された。「聖霊を穢けがす者は絶対に赦されない」と。それくらい、イエスは平伏しのお方なんです。

そして、聖霊が臨んで、その聖霊によって悪魔と闘われました。あのヨルダンのバプテスマのあと、荒野で四十日四十夜。それから伝道に乗り出す。だから、イエスさまにあっての伝道は聖霊による伝道なんです。聖霊に満たされて伝道に乗り出す。それから、夜を徹して祈られた。祈られて、聖霊に満ち満ちて山をくだって来られると、人々は本当に驚いた。手を按おくだけで癒えてしまうし、言葉を発せられるだけで癒えてしまうし、凄かった。だから、小池先生は、「大変なひとだ」と仰った。

この聖霊をキリストが下さるのだから、「神の霊・キリストの霊・聖霊」が一体となって、どうも我々の中に降ってきてくださるように思います。

「聖霊を与える。聖霊をください」

と仰っているけれども、聖霊の背後には、キリストの霊・神の霊がある。小池先生は「聖霊」と仰ったり、「キリストの霊」と仰ったりした。「キリスト」というのはあくまでも天界にいらっしゃる自覚です。我々の方に内住してくださるのは「キリストの霊」と、また「聖霊」とも仰います。だから、聖霊とキリストの霊は一つになっている。

そうなってくると、この霊は審判の霊であるはずがない。そうでしょ。十字架にかかって、十字架を通して来てくださるんですから、審判はもう十字架で終わってしまったている。

「お前たちを救いたい」

という一念に貫かれて、キリストはすべてをなさってくださいました。そのお方の霊であるならば、これは平安を与えざるを得ない。救いを与えざるを得ないでしょ。しかも愛そのものです。だから、小池先生はよく、

「プロテスタントのクリスチャンは未だに「罪、罪、罪」と言って毎日罪の懺悔を  
しているのはよろしくない」

と仰います。道徳的自覚で、「自分はしまったことをやってしまった。相変わらずダメだ」と思うのはいいですよ。でも、

「根源的に十字架で全部ふっ飛んでいるんだから、そんなものにこだわらないで、  
どんどんそれをかなぐり捨てて、分け入って深みへ行きなさい」

というのが先生のメッセージなんです。私はそれにはアーメンです。その辺からの所はキーワードという所で申し上げますけれども、もうちょつとこの「総序」をまず進みましょう。



《旧約に於てキリストはロゴスとして隠れた実存主であり、新約に於てキリストはサルクス》

つまり、「受肉した」ということ。「サルクス」は「肉」といいます。肉と成ったイエス。と成ったイエス、顕わな実存主である。

この「実存主」という言葉の説明は省略します。

この宇宙的歴史的

さつきは「宇宙的人格」とありましたが、ここでは「歴史的」が加わりました。なぜかという、受肉して現れたから「歴史的」というのが加わってくるわけです。キリストとまたイエスとは一つですから。だから、「キリスト・イエス」と我々は中黒（・）でつないでます。「イエス・キリスト」とか。「キリスト」というのは本来「メシア」、神から油注がれたる者という意味です。「救い主」という意味合いで我々は「キリスト」と言います。しかもそれは歴史的にナザレのイエスとして現れてくださったお方ですから、この主人公キリストはこのように、

宇宙的歴史的霊的人格たるキリストはまことに言語に絶する無者である。》

と。さあここで、「無者」と言われてしまいますと困りますね。まず先生において、「無者」というときには、

「神の前に己を何ものともしていない」

という面で「無者」という。私が無い、無私。自我がない無我。そういう意味で「無者」という。

それから、「無限無量」ということ。つまり無限というのは限りが無い。無量というのは量りしれない。際限がない。宇宙的だと。言葉が無いんです。「無限無量」というのを一言で言ったら、何の言葉を当てたらいいか。無限というのは限りが無いということでしょう。もし無限とか無量とかを一言で言えといわれたら、「バカでかい」とか（笑）。「言葉が無いから無と言おう」という感じです。だから、先生が「無」と仰る時、二つの意味があります。「自分を何ものともしていない」という角度からの「無者」と言うときと、それからは、

「言葉が無いから無という言葉当てる」

という、当て字なんです。

だから、「神は愛である」と言うのは、先生は反対なんです。「神は愛である」と言うのと、それで限定してしまうから。愛の面もあるけれども、それだけではないよと。そしたら神は何と言ったらいいか。「無だよ」ということになる。表現しきれない。強いて言うなら、「○」を書く。しかも、○も無限の広がりをもった○です。そう言うしか言いようがない。だから、

「無と呼ぶ」

と言う。この二つがあります。だから躓きなんです。

「禅宗の無なのかね。虚無の無なのかね」



「いやいや、無限無量だよ」と。「無」という字はもともと、「天蓋にじゅうに廿、廿の林」という形からできているという。大空の下に四十の林の木がある。その木の数は無数だ。無という字は無数を表している。これは17頁の所に、「第一章 キリスト・イエスは「無」者である」という所の一番最後の「附記」という所に

《〔附記〕 無という字は本来、天蓋の下に廿と廿の林があるという構成の字で大空の下の四十の林の木の数に数えられない無数を意味すると、ある漢字の構造の書にあった。無は即ち無数無量を意味するとは。》

とあります。「無限無量、無数」という、それから「限定できない、表現のしようがない」という、そういうふうな角度で「無」という。それから、「己を何ものともしてない」という、己を空っぽにしている。神の前に何ものともしてない、その平伏しの姿を「無」という。無私、無我。そういう二重の意味で使われますので、要注意であります。

《宇宙的歴史的靈的人格たるキリストはまことに言語に絶する無者である。この「無の神学原論」は、この驚くべき靈的劇的実存キリストを主体とし、預言者と使徒

「預言者」というのは旧約の預言者たち。「使徒」は新約聖書の使徒たち。

の両翼をもつ霊鳥が創造から終末にかけて神の歴史の天空を飛翔するにも似ていよう。

雄大ですね。

キリストは神のドラマの主なるぞ

キリストは宇宙を抱くみ霊かな》

この二番目の歌がいいですね。

「キリストは宇宙を抱くみ霊かな」

宇宙をいだけ御霊のキリストがこのいと小さい、芥子粒よりも小さい、そういう我々一人ひとりをもつすぐ懇ろに顧みておられる。これ神秘でなくて何ですかね、こんなものは本当に。

でつかい事を考える人は、小さな事は考えてくれない、この世では。いわゆる偉い人というのは。小さな事を考えている人は、「小物こもの」と言われて、大物にはならないと言われる。でも、真理はそうではない。小事に忠実な者でなければ大きなことを委ねられない。大きな事を本当に真剣にやる人は小さな事にも気を配るといのが、私は世の中でも本当だと思います。

この「御霊のキリスト」というのは、宇宙をいだけつつ、いと小さき者一人ひとりを懇ろに顧みてくださる。なぜならば、全部ご自分の創造に成るからです。創造というのは愛のわざでしょ。生命を分かち与えるというのが創造ですから。だから、自分の創つたものを粗末にするというのはおかしいわけです。手塩にかけて育てたものを大事にするはずでしょ。我々一人ひとりとはどんな小さい者も神さまの創造なんです。



## ● 根源現実と絶対次元

そこで、今度は第一章の「キリスト・イエスは「無」者である」という所に入るけれども、ここでちょっと、先生の言葉のキーワードということをやめ予備知識として申し上げておきます。

先生の好きな言葉は、「根源現実」と「絶対次元」。この「根源現実」の背後にあるのは、根源界とか絶対界とか天界とか霊界とか、そういう今、我々が住んでいますこの三次元の世界ではない。その奥にある、それを突き抜けた、次元を異にする世界のことです。要するに、神・キリストの一番初めにおられた、天地創造の始めよりあられた、そういう次元です。この我々の宇宙というのは神さまの創造でしょ。それもキリストを通しての創造でしょ。だから、宇宙よりも更に先におられた方です。それでは、神さまは誰が創ったのか。これは誰も答えられない。宇宙を誰が創ったということは言っても、創ったお方を誰がつくったかは、誰も言えない。それを創った方なら神さまよりも更に偉い方になります、それはいいわけです。だから、創世記の始めの宇宙が創られる前は混沌としていた。それを

## 「神の霊が覆っていた」

という書き方でね。「混沌があった」という。では、「混沌を創ったのは誰か」と、またこうなるかもしれないが、混沌という状態なのでしょうね。神さまの霊がそれを覆っていた。そういう宇宙、我々の世界のもっと根源に、始めより在りし方、永遠に在りたもう方、そういう「有りて在るもの」と、エホバの神さまはモーセに自分のことを自己紹介されました。

## 「我は有りて在るものなり」

と。我々は「有るもの」で、いつか「無くなるもの」なんです。我々は「有りて無くなるもの」です。神さまは「有りて在るもの」で、無くならない。元々から有って、ずっと永遠に在りたもう。そして小池先生はそれに加えて、それがただ在るのではない。他者を在らしめて在る。ただ在るだけではなくて、他者を生命づけて在る。在らしめて在る。そういう存在だという。太陽がそうではないか。存在していることが地球を在らしめて在るではないか。地球に生命を与えているではないか。これが神さまの姿だよということを、先生は言われた。

神さまのお答えは、「我は有りて在るものなり」と。そういう方のいらつしやった世界が、神の霊、キリストの霊がずっと臨在していた世界。これを根源界とか、絶対界とか、霊界とか、天界とかいう。そこでの事実を「根源現実」という。その次元を「絶対次元」とかいう形で先生は表現されます。

それに対して、我々の方は、絶対次元に対して相対次元です。「有るとか無いとか」「生きるとか死ぬとか」、いろいろとこの地上で起こっている事柄は全部、相対界、現象界という。我々の人間のからだ——それは心も含めまして——人間のからだもこういう相対界、現象



界に住んでいます。ここには自然法則が働いています。だから、我々は自然法則に逆らつてはいけないわけです。体には体の法則がある。物理法則もはたります。すべて自然法則がある。

小池先生の使われる言葉で躓きの言葉は何かというと、「信仰的現実」という言い方をされる。これがなかなか曲者くせものであります。先生は

「もう信仰なんていう言葉はやめよう」

と仰るでしょ。だから、こんな言葉は私はやめてほしいけれども。本論の中で使っておられる。この「信仰的現実」とは何ぞやということですよ。

### ● 信仰的現実

ちよつと順序がかなり跳びますけれども、65頁を開いてください。パウロのことを引いておられます。3行目です。第一と第二の段階、これはパウロの体験の順序を言っておられるがこれは飛ばします。

《さてこの第三段階がキリスト体験の内容で、十字架によって罪から解放され、聖霊によつて復活の霊生にあずかり、聖霊における祈りによつてキリストの中へと入れられ、エン・クリストの霊的根源現実に入る。これが使徒らの信仰の現実、キリスト体験であつた。》

こういう書き方をしておられる。ここには「信仰の現実」とある。

「十字架によつて罪から解放され」

これはわかりますね、十字架によつて罪から解放される。

「聖霊によつて復活の霊生にあずかり」

キリストが復活されました。その復活のあの生命にあずかるのは聖霊によつてあずからせていただく。それから、

「聖霊における祈りによつてキリストの中へと入れられる」

と。よく先生は、

「祈りとは何か。自分をキリストの中へ投げ入れることである」

と、この本の中にしよつちゅう出てきます。自分をキリストの中へ投げ入れることである。これが祈りだと仰います。ところが、その投げ入れそのものが

「聖霊における祈りによつてキリストの中へ入れられる」

と。やはり聖霊が原動力になつて、「投げ入れ」ということも促され得るんだという、そういうことをこの文字から感ずる。それから、「エン・クリスト」、いつも「キリストの中に」という現実です。

「エン・クリストの霊的根源現実に入る。これが使徒らの信仰の現実、キリスト体験であつた。」



と。それから次の66頁に行きます。

「我キリストと共に十字架されたり、もはや我れ生くるに非ず」（ガラ2・20）

というあのガラテヤ書とかローマ書の告白を引きながら、

《これが即ち我執という罪から解放されて無私の信仰的現実となったことである。

ここに「信仰的現実」という言葉が出てきたでしょ。

この無私の現実をパウロは旧き我の死といっている。それを私は無といっているのである。

絶対恩恵による無罪、無私、の無である。

この死のバプテスマのあとで、パウロは何といっているか。

「これキリスト、父の栄光によって死人の中より甦えらせられ給いしごとく、

我らも新しき生命に歩まんためなり。我らキリストに接がれて、その死の状

にひとしくば、その復活にも等しかるべし」（ロマ6・4下～5）

「我らもしキリストと共に死にしなければ、また彼と共に活けることを信ず」（ロ

マ6・8）

即ち死から生への転向をしきりに唱えている。それはキリストが贖罪死を遂げたあと

霊生に復活した事実を信仰の現実で受けることを唱えているわけである。この復活の

霊生を信受せんとすれば、聖霊のバプテスマにあずかることを要する。》

ここにもまた「信仰の現実」という言葉が出てきた。それから次の67頁の9行目に行きます。

《このようにして罪のあがないで無私の現実を賜わると、無限無量の現実が即時与えら

れる。それが十字架を本当に体受すれば聖霊のバプテスマが臨む。祈り心で聖霊の内

住が本ものになってくるとパウロの言う「エン・クリスト」が信仰の現実となってくる。

それから67頁の終り行です。

十字架の贖いで無私を賜ると、「われは門なり」というキリストの十字架という門をく

ぐって聖霊界に入る。そのとき無限無量な質の光と生命と愛の聖霊を体受する。それ

をキリストという霊的実存者の「深みに乗り出だす」、キリストの中に投身するといっ

て可い。聖霊を受ける場は祈りである。しかもその祈りとは祈入である。キリストの

中へ祈入するのである。聖霊は知らぬ間に体受される。

ここに「知らぬ間に」とある。

これが「キリストの中」とか、「キリストに在る」とかいう表現で言われている現実で

ある。そこでは第一の我は無いと同時に、キリストに属ける第二の我がある。

これは新しき私の誕生ですね。「同時に」と書いてあります、同時的なんです。

十字架と聖霊の事態が不可離の所以である。無即無限無量の信仰的根源現実である。

今度は「信仰的根源現実」と、こうきましたね。

これが使徒らの信仰の現実であって、……》

と。そういうことで、私はその「根源現実」はよくわかっている。しかし、「信仰の現実」



とか「信仰的現実」とかいう言葉が非常に私にとつては、どう理解したらいいのかとずいぶん悩みました。先生はもう「信仰」という言葉は使わないでほしいと。

「これが使徒らの信仰の現実である」

というのは、使徒たちが生きていた——使徒たちは信仰深い人たちであった——その人たちの霊的現実はどうなものか、その人の生きている、あの人たちが「信仰、信仰」と言っているその「信仰」の中味はどんな現実なのか。「それはこうだよ」という、そのくらの意味なんです。だから、「信仰」という言葉はやめる。あるいは、もし言うならば、「信仰をもって受けとるべき現実」とでも言った方がいいけれども、この「信仰」という言葉をやめまして、

「からだでもって受けとるべき根源現実」

とでも言った方がいいかもしれない。私は「信仰的現実」というのを次のように解説してみた。

「霊の次元において生じている根源現実を信受する——信じて受けとる、あるいは身で受けとる——そのことによつて、その人とそれが結びつく。天界において起こっている事実が相対次元の事実となる。つまり、そこで結びつきが起こる。その結びつきが起こっていること——それを「化体かたいする」と言っておきましょう——

——身につく。その身に付いている状態を「信仰的現実」と言っているのではないか」と思う。だから、いわゆる「信仰をもって」信じてということ。受けとるべき根源的、霊的現実。全存在で受けとること、平伏して受けとること。そういうふうになっている姿が「信仰的現実」という。もうこれは我々の霊的現実である。根源現実には神さまの側の、神さまの世界で起こっていること。我々の方にそれが降つて来て、私たちの中に変化が起こります。そういう「我々の相対次元における霊的現実」であるとか、「肉眼では見えないけれども現実に起こっている変化」であるとか、「現にそれが起こっているもの」であるとか、そういうふうにして言い換えたいと思っています。

よく夏に稲妻が光りますね、天界から光が発して地界に繋がります。あれですよ。天界に起こっていることが、我々が本当に平伏して十字架の有難さに涙して、

「ああ、そうだったんですか。そんなに深いご配慮があったんですか。もう、ありがとうございます。私はただただ平伏すしかございません」

と言つて、自分を明け渡している時に、この稲妻が走るように神さまの霊が降ってくる。そして、

「お前の中に受肉するぞ。天界において起こっている十字架・復活・聖霊という事態はお前の中で全部今起こっている。天界と地界が一つになったんだ。そうなんだよ」

と。この我々において起こっている現実、これを先生は「信仰的現実」と言っておられる。



ただ、先生はいつも「二重性」ということを仰います。

「根源的には小池は贖われているけれども、相対的人間小池はまだデタラメだと、これを仰るからまた躓きになる（笑）。

「小池神学を解くキーワード」と私は書きました。

「相対的人間小池の奥に絶対的なキリストとの交わりの自分というものがある」

と。これは「エン・クリスト」誌の56号（1997年4月、小池辰雄召天記念号）——私はいつもこれを推奨しています——これは皆さん手元に置いてください。これの始めの所に先生の最晩年の講筵のエッセンスが載っています。5回の講筵を一つにまとめである。ローマ書です。それが私には一番ピツタリきます。その2頁の所にそういうことを言っておられる。

《我々は「我を見し者はキリストを見しなり」と、これを本質的には自分の自覚として

もっていなければいけません。相対的人間小池の奥に絶対的な、キリストとの交わりの自分というものがある。》

と。「相対的人間小池」というのは、「目の前に見えている現象界の私そのもの」です。その目に見えている相対界の——これをこつちからこう見ているわけです——その奥にこれがありますよと。相対的な人間小池の奥にこの神・キリストと交わっている、絶対次元の質をたまわっている小池がおる。そいつを相手にしてくれと。どうもそういうことらしい。相対的人間小池なんてものは墓場で死んでしまう。焼き捨てられて死んでしまう。でもその奥に、絶対次元のあの救いをいただいた小池というのは永遠不滅である。絶対に滅びません。これが翼をいただいて天へ昇って行く。皆さんもそうなんだと。だから、

「我を見し者はキリストを見しなり」

と皆言えるはずだ。偉くなったからではない。賜<sup>たまわ</sup>ったんだと。

先生の大好きな言葉は「たまわる」という言葉がある。賜るんです、向こうの神さまの側のご意志なんです。こつちではない。神さまが「上げよう」と言つて、下さった。焦点が合いませんと、それをなかなか頂けない。でも焦点が合いますと、サーツと流れてくる。その焦点はどこで合うかというところ、「十字架だよ」と言う。十字架に焦点したらそこで合うよと。だから、他の所をいろいろ読むのではなく、そこに焦点しろ、そこに集中して読んでごらんと言う。

それから、その56号の4頁の所にもこんなことが出てくる。

《十字架のキリストの贖いで私の過去・現在・未来の人間小池というやつはもう贖われてしまっている。だから、「ありがとございます」と、平伏して感謝する。そして「あなたの生命の霊をいただきます」と言つて、十字架の土台の後からきているところの聖霊をいただく。キリストは聖霊をやるうとして、待っているんだ。》

と。だから、ここで先生が書いておられる、「根源現実としての十字架は永遠不滅の事実だ」



と私は申しました。その永遠不滅の事実である十字架は日々に私に向かって、

「お前はもう片づいているから大丈夫だ。過去も現在も未来も永遠にお前はもう大丈夫だよ。贖われるというのはお前を邪魔しているファクターを全部取り去った。すつかりきれいになっている。何も跡形もない。お前はきれいだよ。無私、無我、

無罪、その無をこの十字架で与えた。そうすると、即、そこへ聖霊が突入してくる。

聖霊という生命が突入してくるんだ」

と。聖霊の生命にわが霊が癒着するんです。密着する、一つになる。わが霊はいつ甦ったかという、天界において天界での根源現実で、十字架・復活の時に聖霊によって甦らされた我が居るわけです、この中に。それはまだ無自覚です、気づいていません。それが本当に

「その十字架でお前はもうふっ飛んでいるよ」

ということを全存在で受けとったときに、

「ああ、そうでしたか、ありがとうございます」

と。その無我を本当におのがものとして頂いたときにその聖霊もその瞬間に、同時的にそこに臨在してくださる。

論理的順序では段階的ですけども、事柄は同時的なんです。私は「三点セット」と呼びたい。「十字架・復活・聖霊」は三点セット、一体としてくださる。これがキリストの恵みです。贖い、復活し、即ち新しい霊に生まれて新しい我の誕生。十字架は旧き我の死。ご復活はキリストの霊生が現れた。その時に私もそれにあずかった。根源世界で聖霊がそれをさせてくださった。そして今度は聖霊です。具体的に我々の中に導き主として宿ってくださる聖霊。この「十字架・復活・聖霊」これは三点セットとしてそのままドカーンと来てくださる。十字架だけが来て、何日かたつてから、「はい次は、復活」。また何日かたつて、「はい、聖霊」と、そういうふうな時間的間をおいてくるのではなくて、根源的には一つ。ただ我々の自覚としては、十字架の自覚は強くても、まだ聖霊が来ているような気がしないということがあるかもしれない。それはいいんですよ、我々の意識がどうなのか、それはいいけれども、構造的には三点セットですから。お嫁に行くならそれを持っていく（笑）。

「新しい生命をいただきました。過去・現在・未来、私はもう贖われた私です、きれいな私です。過去に私は何があつたか、そんなことは知りません。きれいな私です。先祖がどんな罪を犯したか、そんなことは知りません。先祖のどんな汚い血が流れているか、そんなことは知りません。私はもうきれいにされた私です。そこにキリストの生命が宿っています。私もそれと一緒に甦っています。そして聖霊が日々に私の所に来てくださいます」

と。これは日々の現実でなければなりません。



## ●キリスト体験の内容

ですから、さきほどの65頁から読んできました、3行目からのところ。「第三段階」ということで、「キリスト体験の内容」というところ。これは正に我々の相対次元、我々の生まの生活で何が起るかという、それを問題にしておられるわけです。「霊的現実」は絶対次元です。それから、日常生活での我々、これとの関わりです。霊的根源現実で十字架が立っています。そして神さまは限りなく我々に聖霊を贈ろうとしておられます。この限りなく贈ろうとしておられる聖霊を我々が受けとる道は何かというと、これが「祈り」だと言う。しかもその祈りも聖霊に促されての祈りなんです。聖霊が執り成して祈らせてくださる。十字架を瞑想しておれば聖霊が執り成して、そして

「お前はもう解放されている。お前は本当にもう罪なき者とされている。過去・現在・未来、全部贖った。私はお前を愛している。お前に生命をやらう。聖霊をやらう」

と言って、これがグルグル循環している。ですから、この我々の日常生活の中にやはり十字架が立たないといけません。根源現実の十字架が私たちの日常生活の中ではつきりと自分の中に立っていないといけません。

だから、ここは体験のレベルですね。体験のレベルで、これは具体的な祈りが必要だ。具体的に本当に涙する祈りがある。そこに本当に平安があり、感謝があり、讚美がある。これは具体的な事実です。我々は聖霊に促される祈りを通して、聖霊によって絶えずこの根源界、神さまの世界との間に循環が行われている。行ったり来たりする、それが行われている。これが生ける我々の信仰生活というものです。

見えない世界を相手にしているから、「信仰」なんていう言葉を使ってしまうけれども、こんな「信仰」なんていう言葉は止めましょう。見えない世界を見るものとして受けとっている。見えるが如くに受けとっている。見えないけれども、ただそれを受けとっている、そういう姿だということ。だからもう「信仰」なんていう言葉はやめましょうということ。「祈り」というのは、人間の側です。「キリストの中へ入れていく」という人間の側です。神さまの側からは、聖霊が働きかけて、我々を祈らしめてくださる。

「聖霊、言い難き呻きをもて執り成したもう。御霊も我らの弱きを知りたもう」と。そういう形で働いてくださる。それに促されて我々はいよいよキリストの中に入るといふ循環です。そしてそれが日々に必要なわけです。

神さまの側では、「十字架・復活・聖霊」のこの事態は三つでありながら、それが一つなんです。一貫しています。根源現実です。その「十字架・復活・聖霊」という「三相一貫」の根源現実、私の言う「三点セット」、これを我々の自覚としては、十字架にめぐみ、そこで我々が贖われていることを感謝して受けとる。その十字架の土台の上で我々は深く祈っていく。そのときに聖霊が流れてくるのを自覚するというふうには、順序がある。でも、神さまの側ではこれは三者一つですから。それがこの65頁の、



《さてこの第三段階がキリスト体験の内容で、十字架によって罪から解放され、聖霊によって復活の霊生にあずかり、聖霊における祈りによってキリストの中へと入れられ、エン・クリストの霊的根源現実に入る。》

そこと繋がっている。絶対界とそこで繋がる。どうしても絶対界と繋がらないと、相対界だけでおりましたら、窒息しますから。やはり絶対界と絶えず祈りのパイプが必要だということ。67頁の所をもう一度読みますと、

《このようにして罪のあがないで無私の現実を賜わると、無限無量の現実が

これは聖霊の現実です。無限無量の聖霊の現実が、

即時与えられる。

時間的な間がない。即時与えられる。即なんです。別な言い方をすれば、

それが十字架を本当に体受すれば

この「本当に」というのが大事ですね。「本当に」というのはどういうことですかと、これはもう各自にお任せしなければしょうがないですね、本当かウソかは。これはその人が自分の全存在で体受すれば、聖霊のバプテスマは臨まざるを得ない。

聖霊のバプテスマが臨む。祈り心で聖霊の内住が本ものになるとパウロの言う「エン・クリスト」が信仰の現実となってくる。

67頁の終りの行、

十字架の贖いで無私を賜ると、「われは門なり」というキリストの十字架という門をくぐって聖霊界に入る。

根源界に入っていく。十字架という門がある。キリストを瞑想すると言っても、十字架のキリストに自分を委ねていく。そうすると、そこを通過して聖霊の世界へ、絶対次元の中へ入らせてくださる。この聖霊の世界に入っていくと、

そのとき無限無量の光と生命と愛の聖霊を体受する。それをキリストという霊的実存者の「深みに乗り出だす」、キリストの中に投身するといって可い。聖霊を受ける場は祈りである。しかもその祈りとは祈入である。キリストの中へ祈入するのである。

聖霊は知らぬ間に体受される。》

この「知らぬ間に体受される」と、ここで書いておられることは、一回きりのことでは絶対がない。これは「日々」です。我々の祈りとはそういう質のものが祈りなんだよということ。そういう質のことを本当に自分ではつきり自覚するまで祈り込みなさいよと、先生は仰る。それを土台にして、あと具体的なお願いごと、

「あの人を癒してあげてください。あの方は今、困難な中にいますから、助けてあげてください」

とか、そういう祈りが力を持つてくる。だから、まずその場に自分を置きなさいと。これが先生が我々に語りかけてくださったことなんです。よく、



「あなた方は祈っていますか？」

と聞かれた。実はその祈りが最も難しい、私にとっては日常生活の中では。他のことは簡単なんですけれども、祈りは最も難しい。鎮座しまして何分も何十分も祈るといのは私には難しいんです、正直言いまして。

私は、ながら人間かもしれない。走りながら祈っているとか、何かしながら祈っているとか。「祈りに専念せよ」と言われたら、何かたじろぐんですね。その点、先生はすごいですよ。やっぱりあれは祈りの達人ですね。他のことでは、そんなに先生は凄いやと思わない。語学ができるのは、語学の専門家だから当たり前です。それならこつちだって、法律で對抗しようとか（笑）。それはそれぞれの専門がある。けれども、人間として何が凄いかという、あの祈りの姿には私は本当になかなわらない。他のことではいくらでもケチをつけたいことはあるけれども、その祈りの姿にはかなわらない。

キリスト教界の方々が、小池先生の本にケチをつけたり何かなさるのは勝手だけれども、やっぱり先生と同じ祈りの体験をして、そこから勝負をしてほしい。土俵の外から勝負しないで、本当に土俵の中に入ってそこで対決してほしい。そしたら、対決しようとおもったら、「お前と一緒だよ、俺も一緒だよ」となってしまいかも知れない。それが今、土俵の外での議論だから、本当に残念です。つくづくそう思います。だから、先生は、

「自分は受け入れられない。自分は少数派だ」

とか仰るけれども、私は、質はそうだと思う。

だから、私たちはやっぱり先生の霊統を継ごうという、それに吸いよせられて来た私としましては、これは何とか自分の身において本ものにした。それを先生が「使徒行伝の弟子たちの次元だ」と仰るわけです。

「パウロとかヨハネとかペテロを見てごらん。凄いやではないか。キリストを見てごらん。凄いやではないか。大変なひとです。そこに突入しようよ」

と。現代の問題はいろいろあるでしょう。でも、我々はその現代世界の現象に囚われないで、根源界に入り込んでそこから爆発しようではないか。火山のように噴煙を上げようではないか。それが私たちの賜っている使命ではないかと。そのように自覚された。

私もそれに対して全く「アーメン」（然り）なんです。何をもって寄与するか、この少数者が。やっぱりこれだと。しかもこれは誰にでも開かれている。本当に誰にでも開かれている。そういう意味で私は熱中するんです。

「そこまで熱中するなら、もつと祈れ」

「はい、申し訳ありません」

と、そういうことなんですけれどもね。



●第一部 無の神学原論 第一章 キリスト・イエスは「無」者である  
それでは、第一章から順を追っていきましょう。

### 《第一部 無の神学原論

#### 第一章 キリスト・イエスは「無」者である《

これはもう、皆さん、常々聞いておられるところですよ。「霊が貧しい」ということ、自分を何ものともしていない、そういう無者。12頁の終りから7行目の所。

《このような無者、キリスト・イエスの「無」がこの神学の焦点なのである。我執の無い人であったから罪びとではない。そのような「無」は、宗教的実存の無であって、神学的無である。》

難しいことが出てきます。しばらく飛ばしまして、13頁の真中あたり。

《それゆえ、「貧しき者」、  
即ち、「幸いなるかな、霊の貧しき者」、

私心なき無者は神の国の人であるから、恵まれたる哉、とイエスは開口一番に告白宣言した。この一言は全福音の焦点であり、天国への鍵の言である。イエス自身が全くそのような霊的貧者、無者であって、神意を一切としたから、無者は即ち神に對しては義であり、

神の御意をすべてとしている姿を義というんです。それを義人という。その姿が人に働きかけるときは愛となって表れる。御意は人を救うことですから。

人に対しては愛である原相をもつものである。神意が彼において體現された天国体で彼はあった。だから、彼は無比の恵まれたる者であった。実に彼自身の体験から発している大告白であった。》

次の所へ行きますよ、

《そもそも彼はマリヤから聖霊によって生れ、地上に出現した。受肉したロゴス・キリスト即ち、サルクス・キリストである。それゆえ、神の子、ダニエル書に預言されている「人の子」である。このような神の人、イエス自らは自分を何者ともせず、神を自分の全実存の一切としていた徹底的無者であった。神意に全托して、神のふところに在るエン・テオー（EN THEO 神の中）の実存者であった。それゆえに彼は、「わが意に非ず、汝の意志を成し給え」と祈っていた。これが彼の祈りのキー・ノートであった。本質であった。本願成就の祈り、

神の本願をこの私をとおして成らしめ給え、神の御意を今この世に成しめてくださいという祈り、

神意現成の祈りである。「どつどつこの私を通して」と提身している献身の祈り、棄身の祈り、聖意体现の祈りであった。

これが先生の告白録第3巻『聖意体现』の一番冒頭に編まれているものです。それをこの



集会で何回かに分けてお話をしました。

それゆえ四福音書のどの頁においても証しされているように、聖意は彼において体現されていた。驚くべき実存である。これを無的実存という。無即無限無量の霊的現実である。無一物無尽蔵の現実である。最も「貧しき者」が実は最も豊かな者であった。何となれば、彼を通して創造者の全能的意志が発現して創造的なわざが展開しているからである。全福音書といえども、そのことを証してなお足りない(ヨハネ21・24〜25)。彼は全く神の証者である。

無者キリストがどうして無量者キリストであり給うたか。聖霊の現実であったからである。

この無者キリスト、自分を空っぽにしているキリスト、これはナツシングの方ですね。ナツシングがどうしてオールになったかというところ、「ゼロ・イコール・無限無量」(0=∞)だと。この無限大が聖霊であると。聖霊がそこに充滿したもうたからである。

聖霊の内住なくして無量なる内実は在り得ない。

「我自ら何ごとも為し能わず」(ヨハネ5・30)

という無者イエスが

「我と父とは一つなり」(ヨハネ10・30)

と明言できたのは、全く聖霊の内住に因る。「無」の現実こそ無量なる聖霊が内住する事実を、イエスは身証した。

では、聖霊はどこで受けとるか。これが、聖霊体受の場は無であるということ。

### ● 無は聖霊体受の場

イエスは生れながらの聖霊の人である、かの特別な降誕の事実が語る如く。しかし人間イエスはどこまでも我らと同じく肉の人であり、弱き人であって、罪への危機に曝されていた。でありながら十二歳の少年イエスが証している如く、父なる神に在って生きていた。つねに祈り、入る祈りにおいて父と一如の現実を生きていた。

それから今度は、30歳の頃に伝道に踏み出されます。そのときのこと。あのヨルダン川でのバプテスマです。

壮年期を迎えようとしていた三十歳頃のイエスが、ある決定的な体験をした。それはヨルダン川における受洗であった。悔改めの必要なイエスが、洗礼のヨハネから敢て洗礼を受けた。それは罪びとのどん底に自らを置いて罪びとのために執り成す意味のものであった。そのとき同時に彼は聖霊のバプテスマに与った。これは父なる神からの直接のものであった。それ故、天来の声があった、

「これは我が愛しむ子、わが悦ぶ者なり」(マタイ3・17)

「汝はわが愛しむ子なり、我れ汝を悦ぶ」(マルコ1・11)



マルコ福音書の如く「汝」と呼びかけた声であつたらう。

この決定的な聖霊体験によって、彼はサタンとの一騎打を荒野でやった。しかし彼はそのとき聖霊の力を私しなかつた。

頂いたものはどこまでも頂いたものだ。自分のものではないという自覚、これは大事です。宗教家は往々にして頂いたものを自分のものだと思ひ込んでしまった。自分をサムシングとしてしまふ。そこに躓きがあります。

どこまでも内住の聖霊のまま神に全托してサタンと戦つた。自分は聖霊の人だから、この聖霊の力でサタンに勝つてやる、といった霊的傲慢に彼は陥らなかつた。もしそういう心根となつたら、彼はサタンに負ける。サタンはそういう霊的傲慢の首魁しゅがいであるからである。真に聖霊の人は聖霊に在つて、神に全托する人である。

平伏しの人である。

聖霊の力は神の力であつて、私されるはずのものでないものである。イエスはいよいよ無即無限無量の実相を身証してサタンに勝つた。

かくてイエスは無即無限無量の伝道を開始した。

「汝ら回帰せよ、天国は近づきたればなり」（マタイ4・17）

「悔い改めよ」というのを先生は「回帰」と訳しておられます。「悔い改め」というのはどうも心理的な面が働きます。心の中で悔い改める。そうではなくて、先生は「全身、全存在を、今まで神さまに背を向けていたのを、全存在を神さまの方に、光の方に向ける。闇の方に向いていたものを光に向きを変える」ということです。

「時期は満ちて、神の国は近づけり、汝ら回帰して、福音に信じ居れ」（マルコ

1・15）

が彼の伝道の第一声であつた。イエス自身が、神の国の人、即ち、神の支配下にある人、神意体现の人、神国人、天国人として、そこに現在している。だから、「神の国は近づいた」と宣言した。

云々と行きまして、この16頁の終りから3行目、

磁石がどのように揺れても北極を指すように、回帰とは天極、神・キリスト

絶対次元ですね。

という天極に向かつて身心を回らすことである。帰入することである。祈入することである。回帰がつねに新たになされるために必要なのは聖霊の内住である。

ルターがあつた「95箇条の提題」の第1条に、

「キリストは我々にその全生涯が悔い改めであることを求めたもう」

というのがある。全生涯が悔い改めである。それは日々のことを言っています。その悔い改めとは、ここにありますように、全存在を常に神さまの方に向けるということなのです。それには聖霊の内住が必要だと。



回帰が本ものとなる決定的な転機は十字架の贖罪にあずかることと、聖霊のバプテスマにあずかることの不可分の二焦点である。謂わば楕円の二焦点、太陽系における太陽の如きものである。また台風の眼が、無風の焦点でありながらおどろくべき風の渦を巻き起こすエネルギー源であるにも似ている。》

●第五章「キリスト者とは何か——キリストの無者」

それから、第五章をちよつと見てみましょう。

《第五章 キリスト者とは何か——キリストの無者

私はどこまでも自分に関わる事柄として取り上げていきたいものですから。キリスト者とは何か。即ち、キリストの無者である。

(一) a 人間の破れ——原罪・無明》

これは我々の元の姿です。旧き我の姿です。これは『無者キリスト』の第二部の所でやりましたから、簡単にあそこをまた振り返っていただきたいが、36頁の6行目の所、

《人間は誰でも自己中心の失われたる破れ器である。》

どんなに整っているように見えても、どんなに学があるうが、他のいろいろなものが揃っているように、本質的にはみんな神さまの前には自己中心の——この自己中心の姿が「罪」という。そしてその結果として死に定められた失われたる器——破れた器である。放蕩息子が然りである。ルターもそれで悩んだと。

それから、破れの次は砕けという、38頁、「十字架の砕け」、

《b 十字架の砕け——絶対恩恵の無私》

破れた人間はそこで行き詰まります。そのときに魂が砕かれて、「助けてください！」と叫ぶわけです。だから、破れというのは失われた姿。それに人間が気づいたときに、「これは救われねばならない」とか、人間は誰でも生きたいですから。放蕩息子だって、もうスカラカンになって惨めさのどん底で「あつ、俺は間違っていた。父のもとに戻ろう」と思った。心が砕けたわけです。それと同じように、人間というのは、その自分の惨めさに気がつくとき、そこで「あつ、これではいかん。助けてもらおう、救われたい」と、そこで砕ける。これを砕けという。38頁の終りから39行目。

《人類を二分する根本的な分水嶺は何か。その魂が砕けるか、砕けないかである。神の前に砕けない魂は地獄ゆきの泥舟に乘せられる。砕けた魂は天国ゆきの檣舟ひのきに乘せられる。

我々は「破れ」の罪びとである。この一方の悪人のように、砕けた魂となってキリストに平れ伏すほかに道はない。

十字架の一方の盗賊。一人は魂が砕けて聖国に迎え入れられた。では、砕けは自分でできるかというと、これは徹底的にはできない。これがまた先生の目のつけどころの素晴らし



さですね。破れはわかる。そして碎けへくる。しかし、その碎けだつて、「のど元過ぎれば熱さ忘れる」で、すぐ「あれはあれで一つの体験だったよな、あはは。俺は一回り大きくなったよ」なんてなこと、全然、それが本当の救いにはいかない。だから、本当の碎けというのは、キリストご自身が我々に代わって碎かれてくださった、そこへくるんだということ。39頁。

けれども我々の「碎け」そのものは全存在的恒常的とは言えない。それを全存在的、決定的にした人がある。それは「破れ」でも居らず、従つて「碎け」るを要しない人であつた。

あのイエスであつた。

ところが彼は我々の「破れ」を身に負い、我々に代つて「碎け」を全身に受けて碎かれた人である。ナザレのイエスである。イザヤ書第53章の預言を成就した人である。即ち彼の十字架がそれである。キリストの十字架の贖罪によつて、我々の「破れ」は天衣無縫にされた。破れたまま、その奥の相は我執といふ根本的な罪から解放されて、天衣無縫の霊衣が衣せられている。我々はあてにならない自分の碎けも棄て、何ものもこれを碎くことのできない「碎け」を賜つたのである。イザヤ書第53章5節の「彼は我らの罪のために碎かれた」とはこのことである。キリストの十字架の碎けによつて、我らは無罪者とされた。

無者とされた。

絶対無条件のゆるしであり、めぐみである。

「絶対無条件」ですよ。ここをサーツと読み流さないで、「絶対的であり、無条件である」という。「絶対的」というのは「ゆるがない」「変化がない」ということです。そして「無条件」は「条件が付いてない」ということ。これが神さまの救いの質なんです。

絶対無条件のゆるしであり、めぐみである。相対的な、生れながらの我らは相変わらず罪びとにすぎない。しかし、贖われたる我らは罪無き、無罪者、私心なき無私者、即ち贖われたる無者で、これが信仰の根源現実である。》

ここに二重構造というのがある。「信仰でもって受けるべき」という。礼拝の根源現実である——その我々の相対的な人間は相変わらずダメであろうとその奥にある——この絶対界で無私、無罪を賜つた、無限無量を賜っている、そういうイエスと同質なるもの。それをあなた方は頂いている。これが根源現実だよ。それは信仰というもので受けとらないとしようがない。「受けとる」ことを「信仰」というんですから。それが我々の賜つた根源現実です。

「現象としての人間小池、人間奥田、そういったものは相変わらずいろんなマイナスイ面を持っているかもしれない。持っているだろう。でも、そんなことは問題にするな。過去・現在・未来のお前を贖いきつた。真つ白だよ。真つ白なところに



聖霊が臨んでいる。それがお前の宝物だ」

と。「宝があるところに心もある」と言います。「天に宝を積み」と言います。でも、「内に頂いた宝」を大事にしてください。内に頂いた宝、これが天と結び合って、パイプがつかっている。小池先生はこんなことも言っておられる。

「我々はいきなり『父よ』とは祈れない。罪びとであるから。この贖いを頂いて、初めて『父よ』と祈れる。贖いを頂くまでは『主よ』です、『救いたもう主よ』と。『主よ』というところで、十字架で本当に贖われている自分に気づいて初めて、『父よ』と呼ぶことができる」

と、そういうことを書いておられる。

「自分にとってはどこまでも『主よ』だ。その背後に父が居てください。いきなり『父よ』なんて畏れおおいことは自分は祈れない」

というようなことを書いておられたと思います。

そして、40頁、「聖霊の突破突入」。

《c 聖霊の突入——絶対恩恵の無量》

これがないとダメなんだということですね。前半の所は省きまして、聖霊体験のことを書いておられます。41頁の終りから8行目の所。

《現象としては、身体が宙に浮きあがるのを覚えた。全身がみたまにじびれた。正に聖霊のバプテスマを全身に受けたのであった。この確然たる体験のあとで、聖書のヴェールがとれた。聖書の次元は正に聖霊の次元であることがハッキリした。十字架の贖罪信仰が観念的である限り、重大なものが欠けていることがハッキリした。

自分の過去の姿がそうだったと。頭でわかっているけれども、本当からだで受けていなかったと。

贖罪の十字架を全存在を以て体受する棄身の祈りに聖霊の降る事実を発見した。》

先生は自分の信仰を、「かつて観念信仰だった」と言っておられる。そこから脱却して、本当の信仰に帰るのに捨身の祈りが必要だったと。整った頭の祈りではなくて、本当に全存在で叫びかかるような祈りがあつて初めて、いわば我を忘れた祈り……(以降録音なし)

